

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

【氏名】 神田 豊隆

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】

冷戦の変容と日中関係——池田・佐藤政権の中国政策とアジア秩序構想——

【研究の目的】

本研究は、1960年代の池田勇人・佐藤栄作政権の対中外交を、外交指導者の有した国際秩序構想から論じるものである。戦後日本の対中外交に関する従来の研究は、主として二つに分けることができる。一つは、外交文書が本格的に公開される以前の社会科学研究であり、そこでは国際環境を客観的要因として重視した分析が行われていた。もう一つは、2000年頃から始まった一次史料に基づく外交史的研究であり、そこでは台湾問題に焦点を当て、いわゆる「二つの中国」政策として積極的な対中外交を描くことが主流となっていた。

だが、前者は史料的制約もあり、日本外交を内在的に分析しようとする視点は弱かった。後者は、台湾問題に過度に関心が集中し、国際環境の認識を一次史料に基づいて十分に明らかにしてはこなかった。本研究は、そのような両者の限界を克服するため、一次史料に基づいて日本外交の国際環境への対応を内在的に明らかにし、そこから対中外交を論じようとするものである。

【研究の内容・方法】

研究の方法としては、一次史料に基づく実証性を重視した外交史のアプローチを採った。その際、幅広く国際環境を分析の対象に加えるため、多数国の史料を活用した。各地のアーカイブの所蔵史料や公刊史料集、個人文書、情報公開法開示文書といった形で、日本、アメリカ、イギリス、中国、台湾、フランスなどの各国の外交文書を利用した。

研究の内容としては、以下の通りである。まず、池田・佐藤の両者の政治的な師である吉田茂の対中外交に関する構想を再検討した。吉田の議論を国際秩序構想として捉え直せば、それは現状の「日米」対「中ソ」という東西冷戦の国際環境から、中ソを分断することにより、最終的に「日米中」の協調を作り上げることであったといえる。そしてそれは、かつての日英同盟が帝政ロシアの脅威に対して有効であったことのアナロジーから、イギリスの協力によって実現されるものと考えられた。

元来外交的体験に乏しく、吉田の抜擢によって政界入りした池田と佐藤は、こうした吉田の構想から強い影響を受けた。池田は中ソの峻別の必要や、日本外交にとってイギリスの協力が不可欠であることを早期から説いていた。池田は政権に就いた後、「日米中」の協調の実現に向け、同様の目標を共有する松村謙三と協力しつつ、対中関係の打開に努めた。だが、ケネディ政権が対ソ協調と中国の孤立化を推進するようになったことで、こうした池田の外交と国際環境との齟齬は拡大した。吉田はこうした状況で自らの構想に見切りを付けたが、池田は政権末期までその目標に固執した。

佐藤も、首相就任以前から、中ソ一枚岩への懐疑や、欧州諸国の協力の必要に関する吉田や池田の問題意識を共有していた。それはしばしば佐藤に近いと見做される岸信介の立場とは異なっていた。もっとも佐藤は政権に就くと、対ソ外交の積極化を始め、中国の孤立化に与する姿勢を強めた。だがそれは、主として対米協調の徹底として行われたものであり、佐藤も「日米中」の協調を長期的目標として共有していたのである。

## 【結論・考察】

本研究は、戦後日本の対中外交に関する従来の研究に対して、その分析枠組の修正を含めて、新たな問題提起をした。すなわち、かつての社会科学的研究が戦後日本の対中外交における構造的要因として重視してきた国際環境に対して、日本外交に内在的な視点から再び焦点を合わせる枠組、言い換えれば、日本外交の国際秩序観から対中外交を論じようとする枠組である。

アジアの国際秩序において、中国の存在はどのように位置付けられるべきなのか。この課題に対し、国際秩序の積極的な形成者ではなかった日本外交の果たした役割は、決して大きくはなかった。しかし日本の外交指導者の中には、中国を組み込んだ国際秩序の形成に関する、彼らなりの構想が温められていた。そうした中、1960年代において日本外交の主流にあった指導者たちは、「日米中」の協調による国際秩序構想を共有し、対米協調路線に由来する制約によって揺さぶられながらも、その実現を追い求めていったのである。